

「臉に浮ぶ人々」

寺師 虎之助

吾輩性愚鈍にして筆取る術を知らない、好で恥を曝す可きに、非ずと深く慎しみ畏て居る次第であるが、時たま人様に聴てもらい度と思ふ事がムラムラと起る。漱石がペンを握れば夢も哲學できる。阿房も眞剣に考えると萬の一つは眞實に觸れる。

之でも技術家の端くれた。技術に關する事でも書けば良ささうだが、物笑になつては心外でならぬ。

分を識てて危に近よらずとは此男聊か小ずるいので御座る。斯う云ふわけで「建設」には不似合な釋文であるが一寸存在を示さうと大望を起した次第である。

甚だ氣障な表題ではあるが過去三十有餘年の長い間に吾輩の心に常に往來し、眠れる鈍魂を搖動して、呉れる人は無數にあるが之を擇分けて見ると畏敬する人、敬愛す可き人、單に懐しいと思ふ人等千差萬別である。之を引繰めて言葉で表すとせば表題の如きが最も適切の様に思はれる。人物を云々する如きは疵だらけの末鞆の物すべきに非ずとは思ふが悪口をつかさる範圍に於ては野人の寢言と許して貰えやうかと徒然なるまゝに斯くは物する次第である。

諸も諸も文明開花の當世に於ては才氣煥發度胸がよくて仕事の出來ると云ふ秀才型がやたらに多く大和ホテルの宵鳥ではないがガアガアガアガア其れは其れは賑な事である。ところで格別ズバ抜けた所は無いが行正しく血もあり涙も有るといふ部類は割合に尠いものである。況や肚が出て來て人間味が豊で理想に燃え盡すといふ人と來たら、餘程運のいい人でないとブツツかるものでない。

人間の甲乙は何を以て標準とすべきか、人各々意見があらうが吾輩に獨斷を許すならば人間味(人格といふ字は一才冷い)を以て根幹とし之に枝葉を附けて眺む可きである。

大提督ネルソンの功績も彼の私行上の不仕鱗を覆隠す事は出來ぬ。東郷元帥が神様に成たのは對馬海戦の功績ばかりではない。武將としての乃木將軍は兒玉大將に遙に劣るが乃木さんは武神として兒童の胸に生きる。頼朝には義經程の人気は無いし豊太閤の偉大さも其の好色と秀次に對する殘虐が暗い影として永久に付き纏ふ。

暴論の様思へるが維新の大業に西郷さんの功績は絶對的のものでなく新政の立役者としては大久保、甲東が欠く可からざる存在であつた。

然るに西郷さんは日本人に取ては永遠の偶像である。彼の最後が劇的である事が大きな原因ではない。彼は敬天愛人に生き抜いた人であり、情の人、熱の人であつた。

古來凡人の心を捕えて離さない多くの宗教家がある。吾輩の獨斷かも知れぬがキリストよりか釋

廻に親しみが特てるし、日蓮よりか親鸞が近ずきよい。宗教家偉大なりと雖も、凡人の世界がら緊つぱり出しては手が届かぬ。

力が有り過ぎては弱い衆生は壓倒されて眩暈がする。親鸞が衆衆向きののは愚禿なるが故であり、達磨大師に人気があるのはユーモアに富めるからだ。

偏にや凡人は凡人の偉大なる者にこそ引かる可し。人に長たる者が欲を制し愛と熱とを以て部下を導かば強情者も懦夫も喜々として、其の命に服する事必定にして己亦抜群の技量無しと雖も衆良く其の足らざるを補ひ大過を小に止め轉禍爲福の功得となさん。

古今東西を問はず、一人の力を以て大功を修めた例は一つも無い。

八紘一字の大理想達成に捷徑の手段がある。其は愛と熱との國家總動員を斷行し全高等官の心臓に動員マークをスタンプすればよい、嗟はさりながら人間一生60年に満たず、終日苦行する共自力では到底及び難き境域がある。

お互に引きつ引かれつ、道を求めて切嗟琢磨する朋友の存在が望ましく、又我が心を常に擲でグングン此の境域迄導びき呉れる長敬する人が欲しい。運よき事に吾輩にはS君と云ふ朋友があり、長敬する四人の人々がある。高杉友三、河村幹雄、三浦承天、及品川義介である。

「険に浮ぶ人々」の内此の五人を紹介す。

高杉友三君は長崎縣の産である、齡二五で花も咲かずに散てしまつた、明治36年生れて年こそは吾輩より一年下の弟分であるが後にも先にも心から兄事して居た唯一の長敬の友である。

小兵であるが氣宇雄大愨々として逼らず、才氣煥發にして理想高く、義に富み熱血滾るが如くして、然も思慮ありて蒙動せず、意思強固にして挫折する事なし。籍すに尙20年の齡を以てせば、如何なる大事をも成し得たらむと惜まれてならぬ。

君と知己を得たのは七高で同席と爲たからだ。ボートを漕いだ關係で急に親しくなつたが一年の時は平凡な男としか思はれなかつた。身體の割に頭が大きく肩を張てのそりそりと歩いて居た。二年の一學期の成績は四〇人中三九番であつた。吾輩は心配して、彼を鞭撻した。彼は平然として曰く、「餘計な心配だ、二學期に一番なら落第はすまい」と、之からが見物であつた。殊更に勉強する様子はなかつたが三學期は果然二番となり、彼の本性が現れ出した。

三年の冬彼はN君G君三人で無錢旅行をした事がある。大分縣の某驛は當時鐵道の末端であつたが彼等は深夜トボトボと此の驛に辿り着た。錢の要らない一夜の宿が欲しいのである。

驛長室を覗くと誰も居ない、暖房の残温で程よい暖さだ。三人は椅子を三つづゝ並べて横着にも驛長室に寝込でしまつた。

翌期になつて驛長殿は自分の室が三人の無禮者に占領されてるのを發見して驚くと同時に忍心頭に發し、テーブル叩て怒號した。

N君とG君は喫驚仰天椅子から轉り落ちてへたばつてしまつた。驛長殿は尙も喚く。此の時彼は眼を擦りつつ、やおら起上り舉手の禮を以て驛長に對し悠然として唱て曰く「驛長驚く勿れ、時に

無諷旅行者無きにしも非ず」と。誠に駑蕩たり。驛長殿も苦勞人であつた。朝飯を振舞はれて喜び勇む三人を頼しさうに見送るのであつた。

彼は九大農學部農藝化學科に入學し吾輩は農學科であつたが一學期で中退して翌年工學部に轉學した。

下宿は箱崎で近かつた。二人で色々な事をやつた。箱崎の海岸で遊げないくせて強情を張て危く土左工門になる所を引張り上げた事がある。體力の鍛錬だと云ふので築港の人夫に備れて、モッコ擔をやつた。吾輩は三日間氣張たが、彼は十日間頑張た。

肚を練るんだと言ふので大學通りの禪寺に參禪した。夏の暑い頃であつた。和尚が坐禪を組で呼吸を一千數えろと言た。

本堂の大廣間の薄暗い中に只二人黙々として坐て居たが蚊がたかつて所嫌わずチクチク刺しやがる。氣が散て如何にもならぬ。彼が止めたら止めやうと横目で見ると身動一つしない。

歸る時もう止めたといふと、彼は平然たるもの「無我の境の探究は之からだ」と。吾輩は三晩で止めたが、彼は約一月通つた。

河村先生には心から私淑して居たが工學部に限られたる教友會には會員たる資格がない。之ばかりは吾輩の得意であつた。手を更へ、品を換えして頼むが吾輩も取合はなかつた。五ヶ月も経てからだ冬の或る朝早く二日酔氣分の素張しい元氣で吾輩の室に飛び込で來た。五月蠅い奴だと思つて寝た振りして居ると、カラリと窓を開けた。冷い風だ、外を眺めて獨言して居る。

「相當積たぞ……碎覺めて肌心地よき吹雪かな……おい、大望を抱く身が惰眠を食て如何する。起ろ起ろ起んと駭るぞ」

誠に五月蠅、奴だ。「今頃何だ」と飛び起きると、「いゝ話がある、まあ坐れ」。

彼の話は斯だ。河村先生に入門するのに相當苦心した。昨晚やつと許が出て一月に一回づゝ單獨で行て仕事の手傳をする。其は雑誌「日本及日本人」の中から佳作の和歌を拾ひ纏める事である。彼は目的達成の嬉しさから中州のおでん屋を呑み歩て來たらしい。

河村先生は彼の素質を見込だらしい、之から彼がグングン向上し出した。

彼は農學部を牛耳て居た。或る時擬國會を目論み彼自ら議長になつて盛に氣災を擧げて居た。其の頃鐵道疑獄で新聞が賑て居た。學生課では疑獄の模擬芝居でもやるかと思つて慌てて會の中止を命じた。

彼は議長席にスツクと立上つて事務員を叱咤して曰く、「大正の聖代に於ては辨論は自由である、今を去る事拾數年民權思想幼稚なる頃九州帝國大學農學部に於て擬國會を催た時、之が中止を命じた事ありと聴くが、時代は己に大正である官僚の獨斷を以て本議會に解散を命ずるとは何事ぞ議事進行は議長の權限にあり」と。

彼は吾輩より一年早く卒業して朝鮮の某農事試驗場に就職した。爾後杳として消息がない、風の便によれば彼は神經衰弱に罹り役所には無斷で或るお寺に籠て居るらしいとの事、吾輩そんな事がと

打消しつゝも心配であつた。明けて二月、飄然と福岡に舞戻て來た。元氣充滿颯爽たる風情である。

一夕彼と肉鍋つゝいた。障の一室だ、彼の氣焰當る可らだず談論風發將に數萬言。其の言ふ所次の如し。「朝鮮では感ずる所あつて約三月の間外金剛の神溪寺に參禪して居た。神經衰弱等とは以ての外だ沈思默想百日の間、只管心の探究に餘念なかつた。念じ來り觀じ去れば屁の河童だ。百尺竿頭尙一尺進めば凡て之凡俗の境、花は紅、柳は綠だ。白隱は曰はずや「無相の相を相として行くも歸るも餘所ならず、無念の念を念として謔も舞も法の聲」と。無の一字に徹せずば此の心境は解るまじ、君は憐なり凡俗虎公よ。然れ共何ぼ凡俗なりとも心の尊さは解るぢやろう。天高して日月懸り地厚ふして山河横はれ共我此心一度瀝るや能く日月を貫くべく、我此心遠く翔るや能く山河を包むべし、只六尺の肉身に限らるゝ我心に非ず、只五拾年の生涯に盡ぬべき心に非ず。誠に心鑿こそは至玄至妙なり。

然るに心に靈ありといへど磨かざれば日に昏む。たゞ六尺の肉身を天地に托すのみとならむ。

我が親愛なる虎公よ、汝無理會の處あらば、我に倣て想を練り究め來り究め去る可し。光陰は箭の如し、謹で雜用心する事勿れ。吾輩神溪寺に參禪する事百ヶ日、此の間に於て己に一生報國のプログラムを造れり。我國土は神代より豐原と恵來たからには農を以て立國の基本となすべきなり。然るに土地狭ふして人口密なり。今にして大陸開拓の國是を定めざれば誠に由々敷大事とならん。

支那は又困れる國なり。今にして策を施さざれば洋鬼の餌食となり印度に耕せむ。我に一策あり長城を境にして南北二分し、北半は我屬領となして、大和民族を扶殖し、南半は我盟邦として軍事政治經濟的に有無相補ふ一環の繩とすべし。北を固め南を押へ亞細亞の二大國手を握らば八紘一字の大理想の實現は易々たりだ。我輩は此の事ある可きを期し農村青年の訓育に畢生を捧げむと決せり。

茨木縣友部の國民高等學校こそは吾輩の念願達成の搖籃なり。之を育てひろめて一縣一校迄及ぼさむ。君に若し日本男兒たるの熱あらば、吾輩に一臂の力を盡せ。君は北海道に行くと聽く。何百里隔たる共二人の友情に變りなし。孤獨を感じなば此の高杉を想念すべし。壯だ壯だ、一生修養と心得て怠るなど。彼は説き來り説き去り其の盡るを知らず、吾輩は彼の偉に打たれて只黙々たるのみだつた。やがて彼は銚子を取て吾輩の盃に波々と注ぎ。

「おい元氣よく飲もうぢやないか」と自分も盃を舉げた。吾輩は始めて夢が覺めたやうだ。

「すばらしい元氣だ將に焦遂に似たり」

「焦遂とは誰だ」

焦遂五斗方に卓然高談雄辨四筵を驚かすだ」

「何だ、杜甫の八仙歌か、然らば貴公は宗之に似たり」と言ひつゝ微吟して曰く。

「宗之は瀟灑たる美少年觴を舉げて白眼にして青天を望む。皎として玉樹の風前に臨むが如し」

「風前に臨むとは心許ない、だが今夜は君の説法を聽て得る所があつた大いに頑張るぞ」

- 「ウンやらう、今晚の酒は旨かつた將に蘭陵の美酒だ」
- 「玉碗盛り來る琥珀の光、但主人をして能く客を碎はしめば」
- 「待て待て、今日の勘定は主客折半だぞ……知らず何の處か是他郷」…と
- 此の事あつて旬日の後彼は大望を懷いて上京する事となつた、暗い晩だつた。
- 博多の驛で別れる時彼は言つた。
- 「君も僕も末子だ、親は老いとるぞ、少しは功を急で安心させなくちやね」
- 發車の間極彼は突然朗朗と吟じた。
- 「誰か道ふ君王行路難しと、六龍西に幸して萬人歡ぶ地は錦江を轉じて渭水をなし、天は玉壘を廻らして長安を作す」
- 之が最後とは夢にも考えなかつた。
- 四月八日には吾輩も亦小望を懷いて札幌の驛に立て居た。
- 五月十日別てからの第一信を入手した。
- 「當校は目下第一期生徒五十餘名、農村苦の轉禍爲福を念とし、將來農村改造の中心人物と爲り、邦家の爲め大飛躍をなさんとする熱血男兒のみ。その眞剣なる勉強振りと猛烈な勞働振りには參觀人誰でも敬服讃歎して歸る。つまり上に立つ校長が至誠一貫農村問題解決を畢生の事業として一世を卒む献身報國の誠を盡さむといふ信念赤誠の權化であるから、その下に集る諸生ことごとく一粒ありの戦士である。農場は六千町歩廣々茫々たるもので遙か筑波嶺を眺め乍ら敏取る時、使命の重大さを思ひ責任の深く飛躍の餘地大なるに想到し武者振を感じる。先日は駐日丁抹及獨乙公使來校し相互連絡提携を談合した……いづれ其のうち機會を得て面談大いに快語せん」
- 彼からの便りは之が最後であつた。
- 五月末日急性肺炎で忽然として期待多かりし一生を畢た。
- 已に拾數年彼の面影を一日だつて忘れた事がない。頼山陽は齡四拾にして嚴父の杖なきを歎いたと聽く、我は凡骨を抱いて彼の叱責なきを歎く。 (未完)

會員諸氏へ御願ひ

◆轉居、轉任等なされた場合は必ず其の都度御通知下さい。會員名簿の訂正、會誌の發送其他通信事務會務整理上特に御願ひ致します。

◆機關誌建設原稿募集

論說、研究、資料、隨筆

寫眞……工事寫眞(撮影月日及簡單なる説明を附すること)

以上各種共掲載のものに對しては薄謝を呈します。新京交通部道路司内滿洲土木研究會編輯部宛御送附下さい。